KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Inches Centimetres

ホ2
4723
2上

19
2
門 ホ2
號 4700
巻 2

○又或人ハ軍ことゝ云ふ事ハ。孫の兵
法ハ。これハ中ふこゝろ。ぶつてゝ。ゆゝしふいうつし
ぶるたゝかひ。わゝ。あるこゝろ。いりを紀の中。戦国
乃ものゝ。訓意ふ。ちゝ。古ハ。
かゝぶ。ハ。代のたゝかひ。本実ハ。引合ゝ
く。當財乃ゝ美なるゝ。ぶたゝかひ。べし。
みゝ軍ハ人ハ。ゝ。体乃部ゝ。ゝ。一きい
伝ひ。ゝ。ちゝ。ハ。ハ。ゝ。章ゝ
くゝ。ゝ。ゝ。ハ。ハ。ゝ。越ゝ

るべし。故中古発りんせんとうまつ
べうらんやうどのかうりつれば。一人さのさ
きばうつし成むもの古巻物ばかりいろ〳〵乃
まきをちやんめさ。無ようまつまん。人のうと
ありそう山さの一條也。○あの具のようまり
寄一麗さるい命をうまつ煙たるまま。

原文 古老の物語よりそ。阿信貞任宗
任謀叛をおこしそうは。源乃頼義朝臣大将軍
さそ。奥州ふせうまつそふ。まり命ぜ

ふ。近ばの国の住人に。日置九郎といふものあり。
馬物の具のぜうち。寄一麗なるこそけりあく。
あるとはいひそれば。清軍源是を感じ
そうるあり。大将軍頼義うとまつ。汝のかた
矢指ばし。よはいうも作れば。九郎も井そく
成ぜうちはまうへ人あるべうば。若もはどもとけうた
まつ。ばしこ。ひうるふ。業よあ逢一さ作ばりそれば。
之也具氣うして。ひまへ人をうもあ。次の日大将軍
より。使をうまつ。まもくきの一のあり具い

いまゝゝ[illegible]まゐり。ゆもちゝゝ必ずとか
ろぼし命をうしなふことゝ思ふまゐりつゝ賣拾ぐ
りゝゝわれ味方の陣にうるべうべし。後をまもる。
敵ぞゝゝ賣ゝ伏わたりたり。九郎義経てうけまゐり
として。後日の軍ゝゝ乃ふれ為乃具をゝ
寄一番をはゝゝたる。河ゝ毛れ為の具をゝう
ゝりとゝゝゝゝ[illegible]ゝ出まゐり。大わ軍ゝ使を
もつゝゝまゝく。先日の物乃具ゝゝわ。いまゝ
ゝゝゝ。九郎義経聞れ料ゝまゝゝたゝわゝ

南方をけろぼゝ相ゝゝり。急ゝ敵陣乃ゝゝゝ賣
きんべゝゝゝまゝゝゝゝゝゝ作ゝゝゝれゝり。
以乃日れ軍ゝ。黒草毎ごれ濃乃ぐいふも
ゝふをゝんゝゝり。頼義朝ゝのゝまゝく。毛
ゝゝ南遠のゝふゝゝ為の具ゝわれぐゝゝ
ゝ作ゝゝり。後九郎ゝ兵故ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ武士乃ゝゝゝ。為の具ゝ謀小疲ゝり。
ゝゝゝ。身命ゝ先ゝ相ゝゝゝ。文ゝゝりぐゝ。
頼くゝゝゝゝゝゝゝ大将軍のゝまゝ。

物の具よ。桑をけうぢて相ぢ。あるられんゆふ
いよ〳〵。そねざるそよ財宝を費し。美をつくし
きぐとるぐくい。国家う衰微(とやび)なるうれぐ。
えたた兵どもい。そをこうそうたまふ。
ら兵きくてみるこうてはまよ。ひたん。毎年ち
物う所領い点まれる所なる。毎をいぐるる。
寄(より)桑をつし。材をはいれば。其家貧く
なりてどた命をうい。人をも。技わるべきカ
をし。ちうにぐて。敵よ向ひて立びやとつさ

きれ〳〵れば。ぢうく人皆感じたるるり。実(りき)もあれ具
乃寄桑なるいぢるりをとるるるをいぐ〳〵みれ
じ。敵必見ふうけて。井ひのかふる太たとする
なり。ぢあれ具い実(まこと)たを以て勝まべ。
うりうてどもも。を桑乃力にるれるをとりせ
す。太刀を力いうるよく振(きさい)る。あれ骨切るを以
て冷ぢ。馬は長年(ながとし)るやも。遠ぢよ敵を
ば。癖(くせ)ふるくるるよる強に従てとなる。極(ごく)
ぢんぐ。こるを。一軍の大将るるべき人ぢ

れはなぜぞよりて。敵を大将とこそ。業武者に目をとうけぞ。大ゐよくこそ成ぬよ。京のかれをとするこそ。

是なるつせーい

△ちかよくのかくこそ。してあべの貞任宗任よく
ものそむくる時。源のよりちかたて。軍の先とこそ。ちかのふくぐりなれば。俘囚人多くる中て。
ちかのはくるもの。日へ置九郎ざるれうぶり。ち
ちかのはくるもの。日へ置九郎ざるれうぶり。ち
ちかのはくるもの。日へ置九郎ざるれうぶり。ち

もうりょう作りてびたりいるぞいみせのまにまに
行べし。こいこと毒くとまりたりしかれど尚なま
くしうるる。こしちきめごやさよとうんのうと
うびくわぶのりんりうくさ。まふ草をまてはた
くりくさてたくぞこしたびくをえくりくる
にそわてそさで左うかぞあわくはあたまれぶうす
九郎。こいまくたうくちをつばくたはくた
まれねくまうはは対ぶいるぶまの。具ふ者をう
ろくだるふとぶくをくかふわどぶうなきくふ。

疲をはいやしうるうしだちくまのとるわ。国
のやうくうりやぐしぶ。彩ふまのくぶこをとた
ふくふみれしうやくてきまのぞんうぞこの
なりくれいくらぐあまぐしうなりまてりて。
また徒者くしやるくぶをふかなくは。
ちくぞかくたよもうれさはうびやんあり。
と教まれそわぶくくるまたくをくばえくを
とや。性ようれぶはくまたぐよかケりちいがへ
らばくもくを力にるれぶ太力を力へぶまうくきく

ひてものゝ骨きるゝとゝやん。鳥いぶけ斗る
そも遠よにつるれば。癖なく。ちはやふる魂
に。俤ゝ水揉ふぐし。けさ大うゝもつ具乃
きゝくしたぶゝきまげ眼よつけゝめ教
ほどにおりいで方をしゝ先ゝぐさめり。大抵とあり
ゝ人ゝそふんまでゝとゝ。ゝ。ゝれゝも。
ふゝよいう半ゝつゝゞれもゝゞこのゝゝう
なるわをんゝるゞ。伝を強よゝりふんまゝなゝん。
漢文を国ゝようゝん條

初のゝゝをまげんゝゝ。ちてゝゝの法となんゝ。
いゝゝゝ今やゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紀
年にゝゝ義海よゝれ。和中洲の無無開
續ゝゝんゝゝゝゝ。ゝれゝたゞゝ惑いざる
なり。ちゝび行ゝゝよまれゝゝゝゝゝゝ
わりのんゝらゝいなゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝりゝゝ。法則ゝゝ西ゝゝゝゝ
ゝ。其則ゝ教ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
に。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぞ。かこの文のさるをとゝぎれば。これ乃去
まゝといふゝ。ゝ去ゝ。おろ〳〵きゝかことあいせ
ゝ。一篇の義をそなべ〳〵いゝぱゝまろし
たいさるもの文の旅あり。こゝふい紀とゝ。緒
といいものゝ。ゝいふゝ。ゝ。かこゝまろ
づのこをゐやうふるゝ。くゞ〳〵たよりゐ
国風ゝり。こゝい貧素よ事おきをゝ。
ゐゝ。ゝう祢多よをとゝ。ゐむべゝ。旅多
し。記事義編ゝ。ゝよゝるべ。をいはゞゝそも

いゝゝふゝ。ゝ去ゝ。ゝ。行やゝ去
ゝべ。ゝ文章乳乾よ。放曠文小ゝ文とゝ
ゝ。放曠ゝ雄〳〵しく。蘇枝大をゝ。たゝぶ
ゝ事ゝゝゝきゝ。ゝゝつゞ〳〵ゝるをゝ。ゝ文
し同じゝわりふゝ。ゝゝゝたゝをゝ。
みのばゝ。ゝけゝゝひゝをゝ。唯多をゝ。
ぶゝふまゝせふゝ。ゝゝ。ゝゝ。
○国ゞりの緒。ゝにゝゝゝゝゝ。
ゝゝ文ゝゝ。ゝ。放ゝ直筆よ音ゝ。

備ふ行はるものゝごとくなれば。たゞくびなのさまにく。ゆゑびとよりくこゝ是を
そゝぎまさろこゝ。むかしずれ。と習ふべき是即国
風乃又章。さて此時。の学ふもくくもむい。朱
注。既学而。又時〻習之則所学者熟
あり。大全ふ。時〻と注ふ。
そゝろ言ふ。
又時〻と云ふ。初のまなぶ時〻
時者。学者以時誦習之ゝ。春誦夏絃。

秋学礼冬讀書のごとく。四時をもて学ぶのこと
なり。凡そ人の直読ふ。ほとんど義を
しらず。これ初よりいまの本文をもちたるこゝ
ろ。ものやうにおぼゆるのみなれば。ものやうに。
注の言ふ。ものゝ言ふ。ものゝ言ふ。
人情。たゞをはなれ。一章の理ふ明
なるべきなるべし。
国言の意味をもちたるべきなり。
○音ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

いたられど。紀乃文字。漢文をもてかきたるを。
国訓とするゆへ。訳者とくべし。れい先に学び乃
跡了。要をとりて出乃ごとし。又紀をとりて
よりばのうたれど。例乃童べのうたに端をなす。
〈淮南子天文訓をもてかきたる不。神代巻
乃始めに及て其清陽者薄靡而為天重濁
者淹滞而為地精妙之合摶易重濁之凝場難
故天先成而地後定。淮南子。淹作凝。精作清。摶作專。場作竭。
訓みていれるゆへ。これを国

なりぶふぐれるゆへ。そこうほりさけたるなる。いさだまき
ごとゆへやもくぶふぐるうさぐるかぐし。ぬれあやまげ
なりしつちのれちふぬぐまるゆえ。ぬれあやまなぐ。
清陽をいさだまきぬ重濁をふぐれるとよむ
ごとくにいくとおりぬ人のうりがへ。ぬきるくぬ文を
とくくかうぐ。ぬのちぬ。ぬの国ぬ。ふたくくとぬ
くやふふむぐぬふりぬ。加茂氏乃万葉乃
和書をぬ。ぬるなぬぐきくよりあるとぬ。ぬ書をぬ出
ぬるなぬぐ人会とぐし。

○漢文をうつしやう。ひらがなをうつし。ぐんぐんをうつし。漢をうつし。要をもうつしたなどゝ。みふうまぜぶんをかしこ。ひらがなのをかなをふるべし。今世もかんをふるべし。

○雜纂といふ書。李商隱をしるす。

なる滑稽。宋蘇東坡。是忠明黃元吉多。詩を追ひ著されるふし。いと興あるものなり。清水物語の作なるよふ。行なるもの

以ふ。ふ。叶郎女情懷の故。也。もし叶廣宋うくゝ乃著をもて。をれるかもまた自ふよふ。ふ。ふ。

不得已　せんなきもの

○悪病飲酒　辞せられぬ不くり。病とこらえて酒を呑む。○大暑趣舎　紙園舎の家。

○掩意打兒　掩ひ意ていうはゆきをとりして。○流

汗行襟　汗を失れ人。衣の仕方の。○悪瘡灼艾　灼艾はやいと。○為妻

罵愛寵　本妻の名ふ。乳入の妻と。○冒暑迎謁　暑人を迎ふ。○老

乞休致　乞老ーでいふく。役者をあてより。○窮寺待客　貧しき寺ゆえ客

物と称すべしいふ

もてなすべし

不快意　快よろしからぬ。

○絶力切物　力ばそんきなるもの

ふてぬきる。○破帆便風　破れる帆に

逆風。○樹陰

遮景　林の影ふ。○桑墻隔山　桑の垣。○華時無酒

○暑月背風

殺風景　殺ぐ。風なるものと別ど

ぐ。○華間唱道　花の中で唱人。○看華流下　老人の

役人。○苔上鋪席　苔の上に席。○斫都

ろう人。○舞揚　切ハ作ル。○華下曝視　視いで

花の表。○月下把火。

鼓起說傳事　花の表。○果園種菜　花島

に菜大根を蔵。○背山起樓　二階の。○華下

ふい作ル。○養鶏鴨　鶏あるもの。○對華啜茶　酒

花とけぐ。○賞

鶴焼琴

富貴相　ふぎうきうのそう

○駿馬嘶　しゅんめいせい　○燭燄　しょくえん　○栗子皮

くりのかわ　○荔枝殼　れいしかく　○落華毬　らくかきう　○鶯燕語

おうえんご　○讀書聲　○遺下華鈿　かでんの花　○高樓上吹笛

○搆藥碾茶聲

以上李商隱の詩句　本書とうんぐるくんの牧除を参　貴今彼方

時方清女　清女は著者の名

たぐるふるぐるるる

○帆あげる舟　人乃ようこそ　書夏　扶桑

はまぐりなぐるるる

○ねがぐり　○ごすぐち　○こう四つ半　ちぐり地

とうとう　○ちぐりたちぐれ　ねぐりとる

ぐ　○なぐ　○ぐる　○ぐるる　菓子也

ぐるぐるぐるぐる　叶草紙の内ぐり　ぐるぐるぐるもぐり

ぐ　ぐるぐる　ぐるぐる　ぐるぐる　ぐるぐる

ぐ　ぐるぐる　ぐるぐる　ぐるぐる　ぐるぐる

ふるぐるたるる

○なぐるる　○ぐる　○ぐる　○物ぐるるめでたる

ゐるぞとこゝあるうるくち。

ゆき酒さりとくこゝの

○松乃木。秋乃世。山ぶし。山ぶし。鶴。鹿

人ゑりとうるくこゝの

○あくび。ちごぶし。ゑぬをしうぬえもの。ふりぶり

ふるまひちぶ乙ちるいくまひとゝるぶ人ふしふしてすゝ

かるゆりゝいたぶの。世乃流行こゝやたゝうゆるたぶ世すゝぶし。

ちくてきをよゝの

○えのなりろまつり。井もいぬをくゝ井兄井ゝ人族の中

○くゝ酒乃はぶらちりとゝ九折吸入ゆ七曲しいつち乃。きくゝの吟。月一日れだ。

ちくてちうたゝの

○ぶくて。男をこゝたの中。

ゐるくゝ。舟乃乃。

○人のせうそこ伝せぶごとゝたゝの井ゝ伝ふとつゝ

のまにぶ。ちりゝ井ゝ酒ぶゝつゝりゝくし。ぬゝ井

ゝ。ゆぶくゝ。行ふくゝ人の酒井こゝをうゝりぶゝ

○井ゝたふちりるゝれ。井もゝぶゝうゝこゝきゝつけゝ

ゝ。ぶゝ人ゝゝゝゝゝゝれふくし。

たゝぶゝき伝をゝりて。倒を言ゝゝ。これい

よ近よまつ高はまつそなびきまつ

世説新語に。くゝたちまつ。汗せば

たぐひ。賣響り條に。嚴仲弼九皐之鳴鶴。

空谷之白駒。顧彦先八音之琴瑟。五色

之龍章。張威伯歲寒之松。幽夜之

逸光。陸士衡士龍。鴻鵠之褒絅。懸鼓

之待槌。ふぐりのごとくふ相火桶とゝ

に。古今のくゝ乃手をのふまくゝふひ

け相火桶に。京極黄門おもひ

偽作なりゝ。實も同じ郷の撰ゝ新

勅撰集に。家隆ゝ

ゝ入たるなど。

つゝ。西行上人

ろし。彼世説に。要を

すゝ。これに倣ふけるゝ

とよんせるべし。相火桶の歌古今集の序中六歌仙の作を奏しせる

立文中おのゝゝと詠ゝ

ゝる。ゆゝ

偽作なりゝ。まうせふ

ゝ。ゝ

ぞ。ぞ。ぞ。

執轡甚謹。幸而無失。遂至平地。故轡自逸。
俄而顛隕。凡為天下者。亦猶是也。唐主深
以為然。

はれぐ　まふ　ぎ　ぐ　ぬ　ぐ　ぐ　ぬ　ぐ　ぬ　ぐ　ぬ

鏡神願にしたがひ
とりて。去年の春庵のまへに流れよ
うつせり。うやうに枯果てまさんとなげきなげ
○蔽芾甘棠。勿翦勿伐。召伯所茇。と
或人よみてきまくは。けだし詩の情を失ふ
事ばかりなんあるべしとかやもきまることなれ
ばなり。まことに常の題にて「古はうの田
にまたがりて」わらくの新とあるもいぶかしなり。
とよみたるは是也。選乃古詩に「古墓犂為田。

松柏摧為薪。」といへるをはじめ詩にうたれ
ぬる。年ふりて風情きはまりたれば。是又
常なる世のもんだいなれば。栗ばかりとれる
ものをわかひとるかは。韓文乃内「送孟東野
序。始終鳴字をもちゐて。加茂の真
淵翁の説にかくれてうたれ
ふしあるべきやうなれど。なほこれをうた
ひ出るべきなり。
橘乃実樹をうゑかへしてとりて
篇中に成せり。かくれてうたれけるうえ

あるべし。韓文云乃文章いとゝ集及び古文
後集。文章軌範などゝも世に人々言ふべば
岸代。加茂氏乃文章。
氏い樹。花い常樹ちふく人ぞりきこの人々の言て
ぞ言わるゝもなく。酒のみれど香りもなく。
つゝみて楽しうもなく。言へれど言
やもなくぞうれへもどうもうぐはれど
まづしうもなく。けさあるうぬ。俗ものうぬ
いさわれもなくぞうぐりみるもの

みちゝこそ花ばけつべくれうくさこそのすまり
一月乃中こゝぬゝ月よなれやゝこれもなくさ。
むちへうんなく新ふるゝ。扱れ言言ねびつゝあて
見ゝあへうをあうぐちてなくてむるれよ。
世のこゝはこまぐうなゝこそ人をあるのゝきい
にとゝぐ出ゝさ。私云。みゝうくまだうおいけゝこゝち
たくゝみゝふぬぐゝき相しなくぷゝたまげつちい
もなくぷゝまくくゝ出ゝぐふゝすれるのゝう
くくゝもなくぐゝれゝるひまゝぐくゝ乃。

其ともがふとさくぎこそれんうそれ。
此外うつのうえとうつせとの芋よりるべられど
ゆうまちうえびさったまとよるくのこうよりて。前
赤壁賦一篇。大文句法てしをうべ。赤壁賦
大井のよりかして出賦。ちちより拙句共
ぎうふいまうせあこうたれど。おまりふ例とくあけ
まば。虎を撫うる物を嘗くの清とし着こみ手
に作り。固ふ人。絵いこふいまうまうて。立ふ賦を百年ふ。
まいゆくおの貞よ撰つるこうとべ。今い此絵ふ反づす。
たぶたづく彼人とすきうはまやまたまべ乃ちうう乃紀行を
ずんのこ。人うれまう奇ふあさられて賦かぶ人選よあまこをるるものなる

べし。けふ坡居士乃絵ハ約ふ一作なれば。ちうこうこうりううべ。

東坡居士乃賦ハ人くこれば全篇を百筆。
傍注ふ多ほうりこ紀ものみ。
ぬづきのもの多作り。本の賦しん壬戌之秋こうり。固文ふ
友どうこ舟をうこへ。はいはくまチなぐまうこのべこうり。
ま月舟こうこの うりうぶ。拙句大井にのべん。本賦に義
月いまふこうりてこうりうまなこん。吹風いまべこした
清風徐来水波不興
ようこうこ。杯をあげこまらこどた
誦明月之詩歌窈窕之章
まめ。おふつけこうたこうもうこどしなどする
字ヲ含ム
なぶふ。月をあのうこをいでこ。やけしのぼり
徘徊於斗牛之間ノ句ヲ畧シテイフ

ゆふ。岩根乃松乃（此已下八意ヲ得テ詞ヲカフル也。詞ハ古哥共ヲ用ウ）
先はやまわらとそとうるべ。天の川ふねのち
なん。松棧づたふやど乃
つる乗とりくぐ乃。（獨立羽化而登仙）
みさたの乃ちあまり乃
流乃ぢりと。（以下八本文ノマヽニツヾク）
むづ。きふあいせ
うとをとく。

（ヲ拙キ哥ニカフルナリ）
月乃こゝ乃ふ舟く
（彼歌ノ詳ハ）
（タヾタ）（タキ）
舟を拙く人乃
（子バタ）
舟乃ふけもちのふ。
（舞幽壑之潛蛟ニ代フ）
山乃鹿乃ちにたゝ
（泣孤舟之嫠婦ニ代フ）
。乃れまゝ心
（萎字）
めこ。
（春日月明星稀ニ云云。曹操ガ詩ヲ源帥ノ哥ニカヘ、彼武剛ラコノ文ヲニウツスナリ）
いく。
源帥乃
き内。
乃。
に法

吟。源帥はくれゝ年ゝ。
ばれの毎年ゝ
（固一世之雄也以下本賦ノ調ニテ調ヲカヘンナリ）
なり。其げうきたぐひなしとぞ。
〜づるかや。ゆゝ
びるし。やたらる
たるゝ。つまぐ
藥ゝとうん通ず。
（以下八只彼賦ノマヽナリ）
わゝをゝよ。ゆゝ

そちかくるゝのいうのぶかよはひよわゝろへぐ。はさ
（変）
ゝをゝば。
（天地曾不能一瞬トヽヘルヲ古辞ヲモノアヾミル也）
ごとをんるゝ。
（此モ前ノ例ニテ對ス）
つたゆる。
（旦夫ノ語ヲカクリナス）
（此方ノソモヽハカレコノ抑ニテアラズ）
つちのいのこゝろ。
らばちりぢりもろこ
（江上清風二代ノ）
ゝろきた。
（山間明月二代ノ）
こび見ふるのむ。
ちつきば。

ひさしきはたさうづをめぐらんこひきわたりて
舟のうちふれてり。きわめのそとをきはぶぶと
さたふいるやうに。もいわざとをようんやう
ふうまくるふそ。乃体となびく。雑とうん
たゆたりのきぶぶ。まふ一篇を著さんとして。
あるひは毎法自法をのみ倣ひ。中ほとをもうげを
かるなどこそよめ。れ当雑のため。ろく
みて減べし。

源注接合の間に
澤文乃部ひとを撰文をつけとをもびて
なるべし。はなはだまるしうまとみある
とこをもわるいさをうたにはれ。けるものきこをず
そふはは文舎の書れ影をつよて書うれ。れ流れ
しとたふあげて間しを志乃人て書沢
雪れかをと弄引
くをとたふ。書れ作をんと変うるとをづに
井人び間をのをとは源氏のあるり物のまを

やうにもよりけふこそつきてゆくさにはもれぬべ
きよしはかねもうるしはけもれぬ澤べにいとゝ賀べ
てゆくさにはもれぬ言ふうつまゝにまうづるをん
なふうて後ならねばやうやうふうこゝへば。
いづくにもゆくさの歌をとゝこゝにはやや
せ海にゆかげ瀬恵連づ雪月賦をとりて考ふ。
これこゝろ言ふ事なりてはいづれも異なるべ。
そもそもいたゝで後五後濱注釈よりいま白能
能乃こゝろのつゝ字なりてゆづりをゆつき

なりもこゝろみそたまゝ江ゆくそんのか
なしゆかれはうはもゝづよりのゝてうれる
まのをぢやうるるこゝとゝ作りぬれば何く
まゝもうもゝべくれど。かく事ゝまよう
わづゝはけくゝ峰は恵連づう賦よ。梁ゝを新。
雛生枝雙乃名をとゝ作ゝね相如ゆうりてゝとな
ゝふ雛ゝ作ゝ。源氏のあうりりてに今名ゝる。
美のつゝもてゝしれ生ゝのねを作ゝ。一ゆの作あ
作をうる五ゝ出ゝ。こゝせんゝべきゝれ三わゝうし

あれば彼物語よりは作るべくもあらぬ拙きとおぼえ
侍れど。

月日重なりて。時間の変のよりけりなるべく
しかるをば。何わるほどかもくれなんと。
さてしばらくの中にも。維茂いるかの放逸の
所時よりわかる。維光がうち向ごろもかもぎ
てわたくしなるべくあるべきよりはうちてあり
ける。焼深王の園に入りてとどまり所存
とぞつけたるなるべし。やりをとこしり

あけて入り。あけたるべくもあらぬ。
雲ぞ。のるまさ雲ぬ。ぬけたる。
にほのくくとゆく。のめ。光もあり。えも
いはぬをうきに。見ぬとみほどきの。
くれぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
らんとほのめ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
つくなくうんぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
川ならもけんとせねばけいもうあ
るまあんぬの作物乃ものらんぬ。一

ぬぐのうりことをぶきこんでかくるゑせうの
人をまねばつゝえぐつゆしれ毒ぐぶけてもゆも
くれぐちるさゐよさんらんて寄そやうれをん。
みぐきけのこゆそくれんぐぶおやくやく。
ゐそぐぐおつをぐらにすくれとぐんをるほど
にゆしわくば源宰相民部々桂中納言ぐ入れ
てぐくばちの中ぐまのをようてぐまぐぶ行る
とけ雪いうたんおつをんをくのおつ寄たう
をつぐきくうつをゐ法ちびぐうたきれぬ中こ

ゆちもゆのばちくれゆくふをふゆ法う
ゆ法くうつけちぐゆをるほぐ西れ弟のうをう。
女房達のをうゆ寄ぐのふゆゆるい行ぐをゆて
みぐちたの井れ小天河一つれ達をを達ぐく
毛出ぐ雪ゆ法ゆをしぐゆれてくつけくうう
たをぐえ井ゆ動うをゆをゆぐるぐゆまん。
これをつをぐゆれすゆくちをゆて作て
まるくをうりぐきくふおぐちぐをんと。
宰相ゆぐゆちゆ出ぐ。

白雪ひろうもやれにうやくに月のよちかうさだ
なりしし　民部卿

きりげなりしば繁きもあるで雪ふるとりに
こぢれひろかやし　拾中納言

雪のさいしゐみこ山乃やまらぢに立てげよ
そりゐ雪よりしも。ゆきふる松乃葉まで。
稍のうとゆりて。雪とゆくつけるゐ奥ふる
とぢぢれ君つぐ月ふるひ
ひとりもんよそぢれて白雪みだに休稍乃家

もけるし。彼山里人をゆぢしうえくりい
紅葉そでんゆくるぢし。そやしくはしすく
ゆくに。木ぢものそづくゆれがまらどたち
ちるる　行とぢうぬこらしゐぢ。

國文世々の跡

蒿蹊先生著
寛政壬子再考

全三冊

此書は所々に国学の大のことを論し
上古中古迄統べ其国文乃例を筆譯
又万葉の天蹟まて例を引き格を立
て国文を書るゑ登蹄なり

寛政六年甲寅春三月發兒

平安書林

堺屋嘉七
梅村宗五郎
淺井庄右衛門
野田儀兵衛
錢屋惣四郎